届け 世界の果てまでも

令和５年３月１０日　Ｎｏ．７２　文責　校長　飯久保一男

子どもたちのために

この詩に出会ったとき，教育に携わる者として，自分にできることは何かを考えさせられました。

あとから来る者のために

坂村　真民

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
苦労をし
我慢をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分にできる
なにかをしてゆくのだ

この詩は，作者の坂村真民が，６５歳のときに書いた詩を９２歳になって書き改めたもので，自らこの詩を「決定詩」としています。同じタイトルで同じ内容の詩が２つありますが，作者自身が「決定詩」としていますので，こちらを掲載しました。書き改める前のもう１つの詩は，もう少し長く，言葉の順番が違っています。

今号で，この詩を掲載するにあたっても

・先輩方がつくり上げてきた小笠原小学校を発展させられただろうか
・子どもたちは成長しているだろうか
・このあと来る子ども，教職員のために，何ができているだろうか

などと反省を込めた自問が頭の中をめぐっています。その答えをなかなか見つけられず，焦っている自分がいます。

アメリカ先住民の有名な言葉に

地球は先祖から譲り受けたものではない。子孫から借りているものだ。

という言葉があります。日本では，伝統や文化，土地や家や物なども，先祖代々受け継いできたと考えるのが一般的ですが，地球を未来の子どもたちから借りていると考えると，自然や環境などが今のままで大丈夫かなと不安がよぎってしまいます。

先人から渡されたバトンを次の世代に渡していくという考え方も必要ですが，未来の子どもたちから借りているという考えも大切なことだと思います。未来から借りたものは，最低でも借りたときの状態で，未来の子どもたちに残し，返すこと，そして，可能であれば，今よりもいいものにして，未来の子どもたちに返すことが，今を生きる私たちの使命です。

あとから来る者たちのために，ほんの小さなことでも…。

坂村真民の詩をあと２編紹介させていただきます。

ほろびないもの

坂村　真民

わたしのなかに
生き続けている
一本の木

わたしのなかに
咲き続けている
一輪の花

わたしのなかに
燃え続けている
一筋の火

ものみなほろびゆくもののなかで
ほろびないものを求めてゆこう
人それぞれになにかがある筈だ

子どもを指導する者は「一つのブレない信条」が必要です。教師の指導がブレていると困るのは子どもです。指導がブレる教師は信用されません。ブレない信条により，ダメなことはダメと譲らない指導も必要です。

…子どもたちには「なぜ今，先生は怒らないのだろう？」と感じるとき，「今，先生は叱らないとダメなんじゃないの？」と感じる場面があるようです。古い話ですが，私の授業を受けた子どもたちの会話で「イークボｔの怒り方って，私たち目線でいいんだよね」（変な自慢になりませんように…）という声があったと，養護教諭から聞いたことがありました。何でも「いいよいいよ」という教師を子どもは望んではいません。子どもたちだって叱ってほしいときもあるのです。

教師として私が中心に据えたブレない信条は「子どもたちを主体にする」ことでした。授業では「学ぶのは子どもたち」と考えて，子どもたちの考えを中心に授業をつくってきました。様々な活動でも，任せるところは任せ，子ども主体の取り組みとなるように支援してきました。こういった学習や活動は，ある意味，子どもたちにとっては，キビシイものになりますが，子どもたちは授業を楽しみ，活動を楽しんできました。

…「楽しい」の意味はご理解していただいていると思っています。

喜べ喜べ

坂村　真民

喜べ喜べ
喜んでいると
みんな寄ってきて
助けてくれる
それと反対に
悲しんでばかりいると
みんな離れていってしまう
だから喜べ喜べ
それが幸せの秘訣だ

笑顔で過ごすことのプラスの効果も，この紙面に書かせてもらってきました。
子どもたち，保護者，教職員がこの先も笑顔で過ごせるように願っています。
そして，あとから来る者たちも…。